

第30回しんわ美術展 講評

審査員 泉谷 淑夫

審査員 大豊 世紀

【総評】

縁あって昨年に続き今年もしんわ美術展の審査をした。最初に入選と保留の審査を行った時には、昨年に比べインパクトのある作品が少なかった印象だったので、レベルの低下を心配したが、賞候補の審査になって作品を並べてみると、最初の印象は見事に覆された。30回記念展にふさわしく今年も力作ぞろいであることが分かった。しかし悩みに悩んだ昨年と違い上位賞は比較的すんなりと決まった。その理由は新設された文部科学大臣賞を始め、グランプリ、金賞にそれぞれふさわしいと思われる作品があったからである。言葉で説明するのは難しいが、作風や完成度、新鮮味などからそう思えたのである。

一方で入選レベルはやや下がった気もする。応募点数が昨年よりも約50点減少した影響が出ているように感じた。やはり高いレベルを維持するためには多くの応募者が競い合うことが必要である。岡山県という地方の、さらに県北に位置する津山市で行われる全国公募のコンクールである『しんわ美術展』が、これまで長く続いてきたのはちょっとした奇跡である。作品は20～30号まで、出品料は無料、それにもかかわらず賞金は豊富という気前のよいコンクールは他にはない。それが長年続いてきた理由の一つだろうし、実際今年も全国から意欲的な応募者を得ることができ

た。主催者、出品者、ファンの方には『しんわ美術展』を大いに宣伝してもらい、その名をもっと広めてもらいたい。

上位受賞者を圧倒的に男性作家が占めたことも、今回の審査結果の特色である。これも審査員が意図したことではなく、ましてや男性出品者に加点をするなどの巷間を騒がすような不正は一切行っていない。だからこそ女性作家には次回頑張ってもらいたいのである。また上位受賞者の中に21歳や23歳の若者が食い込んできたことにも注目したい。彼らの作品を見るとすでに絵の世界としての完成度がかなり高いことに驚く。最近公募団体展の審査でも若い力の活躍を耳にすることが多いが、作品本位の審査が増え、若者たちにとっては追い風が吹いているのかもしれない。と言っても画面からは作者の年齢が分かるわけではないので、この結果も偶然に過ぎないのだが、若者の活躍を期待している自分がいることは否定できない。

ところで皆さんは会場に並べられた作品を見て何を思い、感じるだろうか。入賞者の作品を見て彼らの技術と工夫に驚くだろうか。それとも惜しくも入賞に至らなかった自作品に足りないものを感じ取ってくれるだろうか。作品を見て研究するところから、新しい闘いが始まっていることを忘れないでほしい。

【各受賞作品評】

<文部科学大臣賞>

加地 守 洋画 《翔ぶ準備はできている》

この作品の明るく前向きなイメージがこの賞にふさわしいと思われた。若い健康的な女性を下から見上げた角度で描き、力強いムーブマン（動勢）を生み出している。背景の大空に浮かぶ雲に大きな翼を重ね合わせたところが作者の工夫。タッチの角度で雲と翼をかき分けている。右腕の扱いも決まっている。

<グランプリ>

安富 洋貴 洋画 《満天に浮かぶ夜》

どこにでもある一本のビニル傘から生まれた傑作である。シンメトリーの構図は、正方形の画面と相性がいい。作者の造形への深い考察が窺える画面である。降りしきる夜の雨の怖さと美しさが、雨音とともにひたひたと迫ってくる感がある。その気配を演出しているモノクロームの技法と光の表現に脱帽！

<金 賞>

松宮 純夫 洋画 《「彼方へ」》

CG や偶然的な技法を活用していると思われるが、技法解説が難しい現代的な画面作りである。空から見た街のようにも、電子回路のようにも見えるグレーの部分と、クラゲのようにも見える緑色の部分が静と動の対照を生み出し、緩やかな移動感覚が伝わってくる。ドットで表された人影も効果的である。

<銀 賞>

赤木 秀明 洋画 《限りある世界の彩り》

今回の入賞者の中では 21 歳と最年少だが、画面構成力は群を抜いて力強い。正方形の画面を斜めに分割し、岩と雲の対比空間の中に若者たちを配している。大半の若者は倒れ、うなだれているが、一人だけ立ち上がった若者がリンゴを手にして叫んでいる。顔をあえて見せない演出法が画面に深みを与えている。

<銀 賞>

稲岡 篤 日本画 《風景》

ざっくりとしたタッチで描かれているが画面からは柔らかな詩情が感じられる。色感の面白さに加え構成にも独自の感性を感じる。目新しいことを狙わず、何気ない日常の風景を自身の感じるまま密度高く描こうとする姿勢に共感と好感を覚える。垂直線と水平線による安定した構図が画面を引き締めている。今後どんな風に展開されていくのか期待される。

<銀 賞>

藤原 郁夫 洋画 《秘密基地》

こんな秘密基地があったら、子供たちはなかなか家には帰らないだろうなと思わせる、リアルティとファンタジーが程良く調和した画面である。中央で逆立ちをしている少女をはじめ、一人ひとりが丁寧に描き分けられている。物語を伝える絵はとかく説明的になりがちだが、この絵は見る者を遊ばせてくれる。

<銅 賞>

石原 ヒトミ 洋画 《^{とき}季》

早朝の光に満たされた冬枯れの蓮池だろうか。清浄な時が流れている。モノクロームの色調の中に巧みに忍び込ませた淡い赤や黄の色合いが、凜とした空気感にほのかな温かさを与えている。画面左下の小禽（ハクセキレイか）の存在に気付いた時、この絵の見え方も変わってくるのではないだろうか。

<銅 賞>

内海 福溥 日本画 《鳥の歌》

しっかりと自己の絵画世界を持った作品である。

鳥の姿を借りてはいるが単に即物的なものにとどまらない力を感じさせる。心象の作品といってもよいだろう。又、技法の面でも形態の面白さや画面の材質感など見所がある。適度なデフォルメの効果もあって見るものを飽きさせない魅力がある。日本画の材料や技法の面白さ美しさがよく出ている。

<銅 賞>

河原 裕 洋画 《渡り蟹》

最初から気になった一枚で、何といても目の付けどころが面白い。台所の流し台の一角をアップで取り上げ、皿に乗った渡り蟹を大きく描いている。渡り蟹の肖像画のようだ。蟹の甲羅や爪の質感描写は、ずっと見ても見飽きない。主役を画面右側に寄せ、少し左側に傾けた構図感覚も素晴らしい。

<銅 賞>

菊地 裕一 洋画 《谷地沼への小径》

いつかこんな道を歩いてみたい、いやかつてこんな道を歩いたことがある、という具合にこの絵を見る人の感想は様々だろうが、何気なく踏みしめている大地が、こんなに美しいものだったのかと気付く人が多いのではないだろうか。作者の自然観察の鋭さと、自然を見守る優しさに敬意を表したい。

<銅 賞>

木村 祐作 洋画 ^{とぼり} 《帳を下ろせ》

画面の奥に群れているのが猿と気付いた時、ドキッとするのではないか。猿の描写は大掴みだが、ひそひそと話し合っている様子や静かな動きが伝わってくる。画面構成も大胆で、画面の下半分を開けた空間処理が効いている。画中のイーゼルにかけられた巨大なキャンバスに何が描かれているのかが気になる。

<岡山県知事賞>

小川 一生 洋画 《立ち向へ NIPPON》

名画や名作の引用は難しいが、この作者はとりわけよく知られた日本の版画（北斎・神奈川沖浪裏）と西洋の彫刻（サモトラケのニケ）を対置させ、両者がせめぎ合うような緊張感を生み出している。それは平面と立体、装飾性と写実性、モノクロームとカラーの対決から生まれる壮大なシンフォニーでもある。

<審査員特別賞>

岡村 智恵 洋画 《Big Smile》

昨年、岡山県知事賞を受賞した作者だが、今年是一段と技術を上げたと思われる。白黒の色調に密度と冴えが加わり、繊細で大胆な画面は見飽きることがない。「ミニバイクにまたがって大笑いするおばちゃん」というモチーフもユーモアが感じられる。さらなる進化を期待して、今回は審査員特別賞を贈る！

<津山市長賞>

高務眞佐子 日本画 《バナナの花》

バナナの花という具体的なものを描かれているが、装飾的な描写により具象と抽象が入り混じった不思議な調和が見られる。その思い切った割り切り方に強い意志と感性を感じる。中間色を中心とした明快な色彩は周到に計算され小気味よいリズム感が出たユニークな作品となった。

<真庭市長賞>

藤井 正男 洋画 《溪谷の彩》

昨年の作とは色調をガラッと変えて印象を一新し、見事に同賞の連続受賞を果たした。この作者にもともと備わっている構図のバランス感覚と豊かな色彩感覚が発揮された快作である。そばによって枝の繊細な描写も味わってほしい。

<美作市長賞>

安東 公一 洋画 《イタリアン・レストランテ DOMANI》

レストランのシェフが食材の準備に勤しんでいる。花や食材に囲まれた空間はただでさえ幸せ感が漂うが、この絵ではおおらかな描法がその感を増幅させる。絵には主題に合った描法が大事であることをこの絵は教えてくれる。

<山陽新聞津山支社長賞>

福島 敏也 洋画 《樹 '18》

樹木の持つ豊かな表情に魅せられる人は多いのではないだろうか。この絵では凸凹とした幹の表情が格子状の線によって捉えられている。この線が表皮の硬さも伝えてくれる。ただし、右に傾いた幹の力強さに比べると、上に伸びる幹が弱々しいのが惜しまれる。

<津山朝日新聞社長賞>

森岡 秀行 日本画 《小菊》

日本画の伝統をよく踏襲し安定感のある作品になっている。色彩も穏やかに表現されていて実直な制作姿勢が感じられる。清涼な空気感が見る者を心地よくさせる。ややもすると類型的になりがちなモチーフだが、しっかりと描き込んだ結果、描写のメリハリが画面を充実させている。

<奨励賞>

内田喜美子 洋画 《華曼陀羅》

モーリス・ドニという画家の装飾的な画面を彷彿とさせる佳作である。近年は写実的な描写に注目が集まりがちだが。このような装飾的な画面処理は再現性から自由な分、様々な冒険ができる。描かれているは一種の樂園だろうか、花や緑にはなぜか女性が似合う。

<奨励賞>

大西 隆夫 洋画 《何想う》

切り株の間に佇む一匹の猫を描いている。猫の体の柔らかさや温もりが切り株との対照でよく伝わってくる。気になったのは手前に転がった枝に存在感が希薄なことと、斜めの切り株の底面が明るすぎる点である。写真の貼り合わせのように感じられるのが惜しい。

<奨励賞>

桂 哲雄 洋画 《ハノイの虹霓》

絶妙の構図感覚で、この作も最後まで上位賞を争った。幾何学的な直線の構成の中に、有機的な人間と犬のフォルムを納め、小舟の舳先の曲線と右奥の虹の曲線が呼応している。ベトナムで見た一瞬の光景から思いついた構図だろうか。作者の並々ならぬ力量を感じる。

<奨励賞>

川西加奈子 洋画 《昭和は何処へ》

一軒の廃屋を精緻なタッチで描いている。文明（建物）が自然（植物）に取り込まれていく様は、哀しくもあり、美しくもある。左上の空間が気になるが、もっと大きく廃屋を画面に納めたらどうだろうか。対象に迫ることで新しい展開が開けるかもしれない。

<奨励賞>

黒川 達也 洋画 《5月の薔薇》

淡い色調だが、絵としての強さを感じさせてくれる作品である。水彩画の良さをこのように引き出せる作者の技量は素晴らしい。若い女性の表情や白い服装から、清楚な中にも凜とした空気が感じられて、絵の世界に引き込まれていく。絵は必要なだけ描けばよい。

<奨励賞>

後藤 尚毅 洋画 《土の歴史》

作者が近年追求している世界だが、今回の絵は全体の色調が良い意味で明るく軽くなったように思われる。その結果、乾燥した大地とそこに注がれる日射しが感じられるようになった。この日射しをもっと強烈にしたらどうだろうか、ふと思った。参考までに。

<奨励賞>

佐田 涼香 洋画 《巡る》

シンプルな画面だが、見上げる角度で観覧車を描いた作者のセンスが光っている。しかし思ったほど観覧車の大きさが出ていない。画面ぎりぎりに全体を納めるのではなく、画面の外に飛び出させてもよかったのではないか。空の描写とともに課題としてほしい。

<奨励賞>

関水由美子 洋画 《風のはざま》

今回の授賞作で唯一の抽象画である。抽象画は画面構成と色彩が命である。理屈や意味ではなく、直感的に造形としての魅力を伝えなければならない。この絵は地の白を余白として生かし、鮮やかな色彩を偶然的に散りばめ、細部にも見所の多い世界を創っている。

<奨励賞>

田中 MAN 洋画 《ぎゅうぎゅう。》

動物画を専門とする作者の、動物愛がにじみ出たような秀作である。二匹の豹が絡み合う姿が楕円形の中に納まり、強い印象を与える。この作も最後まで上位賞を争った作で、画面のサイズが S30 号であったなら、他を圧倒していたのではないかと思われた。

<奨励賞>

寺井 達哉 洋画 《うつろい》

この絵の繊細な光の表現は最初から強く印象に残っていた。上位賞の候補として最後まで残っていたが、惜しくも奨励賞となった。光の描写は申し分ないが、空の面積が少し広いのではないか。空の上部を手で隠すと、この絵の印象がより強まると思われる。

<奨励賞>

寺原 孝樹 日本画 《灯》

闇の中に浮かび上がる街灯が意欲的に描かれている。闇の表現を単なる黒色にはせず、複雑な色の重なりでその空間の深さを出そうとしている。見えないものを凝視して闇の中に何かを見出そうとする探求心を感じる。着目の新しさと描こうとする意欲が評価された。更なる追及を期待させる作品である。

<奨励賞>

渡田 智佳 日本画 《みなとぼこ》

港の倉庫を描いたものだろうか、何気ない風景の中に確かな存在感が漂う。素直な描写のようだが逆遠近法をさりげなく使い独特のニュアンスを出している。唐突にさえ見える建物だが、存在に対する根源的で不思議な感覚を思い起こさせるようだ。作品に対する研究と実験に取り組んでいるように見える。

<奨励賞>

永原 和子 洋画 《日記 KAZU・2018》

昨年の金賞受賞者の作である。重厚なマチチールや淡い色調など、技法の冴えは相変わらずだが、今回は手前の世界と背景が分離してしまった感じで、作品全体としての統一感や密度が弱まってしまった。冒険心を忘れずに、今後も新しい展開を見せてほしい。

<奨励賞>

中森 順一 洋画 《内なるシンフォニー》

昨年銀賞を受賞した作者の作品である。相変わらず安定した構成力と描写力を示しているが、前作のように想像力を刺激する部分が少なく、画面の中だけで物語が完結しているように感じられる。ソテツをもっと強調するなどして意外性を持たせてみたらどうか。

<奨励賞>

安井 智子 洋画 《Origin》

今年の県展で山陽新聞社賞を射止めた作者の作品である。微細に描きこまれた建物や樹木の描写は相変わらず冴えている。ただ画面サイズが小さくなったことで迫りに欠ける点は否めない。コンクールでは強いインパクトも必要なので、今後の課題としてもらいたい。